

最後の葉っぱ

渡辺 恵子

二十二年前に九十四歳で他界した祖母は、華道家だった。実家の庭には、たくさんの花や葉物が植えられていて、祖母は自分が育てたハランで、流儀花を生けるのが趣味だった。

一番長いハランを、花留めの真ん中に挿して、それに大、中、小、取り混ぜたハランを何枚も添わせていく。葉の向きは、左右斜めに流して、根元はまるで、一本の茎のようにギュッと締まっている。私は祖母の背後から、その芸術作品が出来上がっていく過程に、いつも魅了されていた。

あれは四十余年前。私が高校生の頃だった。学校で模擬試験の結果を目の当たりにして、憂鬱な気分が家路についた。

母は学歴偏重主義で、私は出来のいい妹と、いつも比較されながら育ってきた。

私が中学校一年生の時、読書感想文で特選を取ったことがあった。私は心躍らせながら母に賞状を見せた時、母は洗い物をしながら、チツと舌打ちをした。

「作文なんかどうでもええけん、一回くらいテストで百点取ってきな」

それ以来、私は母に対して心が貝になった。そんな家庭環境の中で、私は唯一、閉ざした貝の蓋を開けられる場所があった。

その日も、母の小言を散々聞かされた後、私は離れのお花の稽古場に飛んでいった。

襖を開けると、祖母はお弟子さんたちへのお手本用にと、庭で摘んできた縞ハランで、流儀花を生けていた。

私は祖母の後方に正座した。そして祖母の背中に向かって、ポツリと呟いた。

「おばあちゃん。テストまたあかんかったわ」

祖母は何も答えず、ただ黙々と葉っぱを矯めていた。

それから小一時間ほど経つたろうか。突然祖母の背中から声が出た。

「ちよつと、ここへ座ってみな」

私は戸惑いながら前に進み、祖母の真横に並んだ。私の目の前には、古新聞の上に置かれた縞ハランが八枚残っていた。

「これから最後に流す一枚を選ぶわな。さあ、どの子にしようかいな」

祖母はいかにも楽しげに、葉っぱを一枚一枚手に取っては丹念に眺め、花器に生けられている完成間近の葉っぱたちに、いろいろな角度から添わせてみては、また戻す…。

しばらくして、祖母は一枚の葉っぱを取り上げ、自分の膝元に引き寄せた。

「あの場所に持つていけるんは、この子しかおらん」

予想外の展開に、私は思わず声が出た。

「おばあちゃん、その葉っぱ、八枚の中で、一番汚いでえ。葉っぱの先は割れとるし傷もあるし、縞の入り方もまだらで、形も歪やし」

私の言葉に、祖母は鼻で笑った。

「この子には勢いがある。まあ、見よってみ」

祖母は、その葉っぱを嬌め始めた。

「なあ、何でもこの葉っぱでないとあかんの？ 他にもいっばいきれいなのが残つとるでえ。それとも他の葉っぱの引き立て役にするん？」

その時の私は妙に苛立ち、祖母に食い下がった。

祖母は愛おしそうにその葉っぱを磨りながら、私を横目で見た。

「同じものを見ても、それを傷と思う人もおれば、切り込みを入れとると思う人もおる。歪な形も、まだら模様も、それを変な色合いと言う人もおれば、面白いと捉える人もおる」

腑に落ちない顔をしている私に、祖母が微笑みかけてきた。

「花でも人間でもな、神さんから与えられた適材適所があるんよ。ほんでその場所では、必ず輝けるようになってるんでよ」

祖母の手に委ねられた一枚の葉っぱは、やがて見事な曲線美をかもし出してきた。

祖母は、その最後の一枚を花留めに挿した。

私は一瞬、息を飲んだ。中心に凜とたたずむハランの葉先と向かい合って、勢いよく何か語りかけている。葉っぱの左右非対称な膨らみも、ささくれだつた部分も、すべて個性に変わった。

「この子が最後に入ったたら、全体に趣が出たやろ？」

祖母は、誇らしげに言った。私はまるで、自分のことのように嬉しかった。

「おばあちゃん、この子、主役に負けてないな」

すると祖母は、急に神妙な顔になった。

「勉強は学校で教えてくれるけどなあ。あんたが一番きれいに咲ける場所は、誰もあんたに教えてくれるけん、これから自分で探すんですよ」

その言葉の意味が、その頃の私にはピンとこなかった。でも、あれから長い長い歳月が経った今、私の心にズシーンと響く。

私はこれからも、「最後の葉っぱ」になれる場所を探し続けたいと思う。



ハランの流儀花